

無常観の二面性について

六年 S・K

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

これは、鎌倉時代に成立し、平家の栄華と没落を描いた、平家物語の冒頭部分です。耳にしたことがある人がほとんどではないでしょうか。ここには、無常観という、仏教的思想が顕著にあらわれています。

無常観は、辞書には、一切のものは無常、生滅し変化して常住ではないのだという観想とありました。難しい単語ばかりがならんではいるものの、要は全てのものは、永遠ではなく続かないということで、人生は儚いものであることのたとえとして使われます。この考え方は世の必然の流れを言ったごく当たり前のことであり、単純といえば単純であるものの、たった漢字三文字では表しきれないほどの深い意味を持っていると、わたしは身を持って感じています。多くの場合、無常とは死をさしていわれ、暗くネガティブな印象を与えがちですが、この言葉が持つ意味を私は別の視点から捉えられると、考えています。この言葉の意味を問われたとき、辞書にある言葉のとおり簡単に答えることもできますが、私は、一言ではあらわせないものと答えます。ひとによって考え方は違うものの、無常は光と影という相反する面を持ち合わせた複雑なものだと、少なくとも私は思うからです。

物事が一貫して永遠ではないということは、喜びや楽しさ、幸せな気持ちも永遠には続かないということの意味します。ですが、見方を変えて考えてみると、人の苦しみや悲しみ、辛さから逃れることのできる救いであるとも捉えられるのではないのでしょうか。実際に、移り変わる時間によって、忘れたい過去の自分や辛かった出来事などから助けられたと思う経験が誰しもあるのではないのでしょうか。また、それが過去のことにおいてだけでなく、現在進行形で苦しみや辛さを背負っていても、時間が解決してくれるだろうという思いを感じ、慰められることがあると思います。このように無常観は、喜びや幸せを奪ってしまうことがある残酷なものであると同時に、人が苦しみから逃れることのできる希望、救いであるという、パラドックス的要素のある考え方だと私は考えます。

独裁的で恐怖政治的な特徴を持つ平氏政権において、栄華を極めた平家が、逆に彼らの徹底的な他氏排斥によって、平家の没落を早めることになり、源氏

との争いに敗れ衰退し、滅亡していく。栄華は長くは続かないものであり、『平家物語』では生々流転のドラマが哀しみと共に語られますが、平氏に恨みを抱いていた反平氏の武士たちは、希望や救いとまではいかないでしょうが、安堵の気持ちがあったのではないかと思います。これらのことはまさに、無常という言葉自身が光と影を持ち合わせているといえると思います。

このような考えに至ったことは私にある気づきを与えてくれました。

私は、幼い時からわが道を行く性格で、周りの目をあまり気にしない、他人は他人、自分はこうだからこうなんだと、ある一点しか見えなくなってしまうことが多々あります。この点が私の長所だといえればあながち間違いではないけれど、悪い意味では視野が狭い、頑固で硬すぎる場所があるとも言えます。自分で自分を追い込んでしまう事も少なくありません。そういう時、時には、柔軟性を持って考え方を換え、少し時間を置いて、適当に対処する事で、見えてくることではないかと『無常』をめぐって考えを深めたことで気付かされました。冷静になることをせずに、感情的になって完璧を求め続け、目の前に立ちはだかる壁とにらみ合い続ければ、いつか歯車の狂いだすときがやってきてしまう事は容易に想像できます。向き合い、乗り越えることで感じられる、発見できる、得られるものといったらとても大きなことだと思うし、そこには当然喜びや幸せが伴うでしょう。自分の限界を知りたいと求めること、限界を超えようとする事、もっとも、私はこの表現があまり好きではないのですが、そうすることが悪いことだと言いたいものではありません。ただ、大事なことは、困難に直面したとき、あるいは、忙しい毎日の中で、ぎりぎりに自分を追い込むことにばかり執着するのではなく、少し距離を置いて冷静に考えてしなやかな心を持ち続けることではないか思います。

何かこれからの人生で岐路に立った時、あるいは大きな困難にぶつかった時、または挫折を味わった時、この思いを持つことで物事を楽観視して考える、良い意味で割り切って物事を判断する事ができるかもしれないと思うようになったと思います。ただ、この割り切って考える冷静さというのは、自分に負けて逃げることではないと思います。いつも自分に負けて今向き合っている問題から逃げてよいというわけではなく、自分を取り巻く環境の流れに身を任せて、移り変わっていく時間の流れに身を任せながら、よい加減に適当になればよいのではないか、ということです。

無常という言葉を楽し観的な意味を持つ言葉として考えてみることで、私にと

ってプラスになるようなものを与えてくれたと思うと同時に、最初に述べたようにこの言葉は、なんて深く、奥のある言葉なのだろうと、少し恐ろしくも感じました。また、この言葉を考えるにあたり、日本の古典文学の素晴らしさ、特に中世文学に見られる仏教観のよさを、改めて感じました。実は、私は、古文が大の苦手ですが、私のような人間にもそうだったように、仏教の教えが当時の人々、学者や武士、朝廷にまでも広く信仰されていたことにも納得がいくな、と思いました。

世界には、様々な考え方、思想があり、そして哲学があります。ひとつの考え方の中には、それを信仰するそれぞれの人の捉え方や価値観が存在します。そして、その哲学には、中世古典文学にみられる無常観の背景にその教えを説く仏教があったように、宗教があり、そして、その根底には、日本が歩んできたのと同様に、それぞれの歴史というかけがえのない財産があります。歴史、宗教、哲学。これらは別々のものとして捉えられがちですが、切り離すことの出来ない深く関係のあるものなのではないかと、無常観について考えることを通して実感しました。

現在、高校三年生で受験生という立場で、自分の将来を具体的に、現実的に考えなくてはいけない状況にあります。大学では、史学や哲学を学びたい、と漠然と考えていましたが、他の経済学や商学のように、実学ではないので、将来のことを現実的に考えると、友人や両親にも、話すことに気が引けていました。ですが、恵泉での様々な学びを通して、またこの感話を通して、自分の考えを深めることで、自分を見つめ、自分はこういうことを考えていたのか、と感じていくうちに、自分が学びたいと考えていることを、もっと深く知る事は、大学で学ぶに足ることだと確信することができました。

私は、日本だけではなく、世界の歴史を学ぶことを通じて、様々な宗教、そしてその中にある思想や哲学にもふれていきたいです。そして、その前段階にある今、自分で考える事の大切さを忘れずに残り半年という少ない恵泉生活の中で、学びを全うして行きたいです。